

JAえちご中越 さんとう地域「新之助」栽培暦

新之助研究会

月	4月					5月					6月					7月					8月					9月																			
日	5	10	15	20	25	5	10	15	20	25	5	10	15	20	25	5	10	15	20	25	5	10	15	20	25	5	10	15	20	25															
出穂前後日数	品種特性に合わせた作業計画の策定															-20 -11 0 +43																													
生育ステージ	種子消毒 (温湯消毒)					【作業目安】					浸種開始					4月8日					催芽					4月18日					播種					4月20日					播種量の目安：150g／箱				
	育苗日数は20日程度					田植え 5月10日～					中干し開始 6月10日～					最高分け期 7月5日					1回目穂肥 7月23日					2回目穂肥 8月1日					出穂期 8月12日					収穫期 9月24日～									
	「いもち・紋枯病予防」 ルーチンブライト箱粒剤 播種時～移植当日					除草剤散布					“補植苗”を 早期に撤去する					6月中旬～ 葉いもち病 【早期発見 早期防除】					★必須防除★ 穂いもち病 ゴウケツ1キロ粒剤 出穂20～10日前					【カメムシ防除】 スタークル剤 穂ぞろい期																			
	・田植後→3～4cmのやや深水で植え傷み回避 ・活着後→2～3cmのやや浅水で早期分けつ促進 ・除草剤散布時→湛水状態(水深5～6cm)で散布 ・中干し開始まで→浅水更新でフキの発生防止					やや深水 一時湛水 浅水更新					生育量を把握して遅れずに!! 小ヒビが入る程度になったら終了					飽水管理の継続 ⇄ タメ水厳禁 (異常高温時には一時湛水)					フェーンの発生時：地域の水利条件等に応じた こまめな水管理の徹底で夜間水温を下げる					出穂後25日以降(通水最終日) に最終かん水を実施!!																			
栽培管理のポイント	Point 1 ～適正な作業計画の策定により 健苗を育成します～					Point 2 ～適期田植えで 初期生育を確保します～					Point 3 ～生育状況にあわせた生育調節で 過剰生育を抑制します～					Point 4 ～病虫害防除と水管理の徹底で 稲体機能を維持します～					Point 5 ～適切な生育診断による穂肥施用 →品質・収量を確保します～					Point 6 ～適期刈取、適切な作業により 高品質米に仕上げます～																			
	① 適期播種、適正な播種量、育苗期間20日程度で健苗を育成 ② <u>土壌診断結果にもとづく土づくり資材(有機質・ケイ酸)の施用</u> ③ <u>転作跡・ほ場整備直後や、いもち病の発生しやすいほ場で栽培しない</u> →作土深15cmの確保～ほ場条件に応じた適正量の基肥施肥 →基肥N施肥量のめやす：「10a当たり2.5kg～3.0kg」					① 移植前追肥(べんとう肥)の施用 →活着・初期生育を促進 ② 田植期のめやすは5月中旬 ・栽植密度：50株／坪 ・植付本数：3～4本／株 ・植付深さ：2～3cmの浅植え ③ <u>いもち病の発生しやすい地域・ほ場では予防防除(箱施用剤)を徹底</u> → <u>補植苗を速やかに撤去</u>					① 田植30日後をめやすに目標穂数の80%(320本/㎡=1株あたり21本)を確保してから→適期中干し開始 ② <u>全ほ場で溝切り(10条：3mに1本)</u> → <u>速やかなかん水・排水管理</u> ③ 本格的な梅雨入り前にしっかり地固め→中干しは小ヒビが入る程度になったら終了～遅くとも出穂30日前までに飽水管理へ移行					① <u>いもち病・紋枯病の早期発見～早期防除(こまめにほ場巡回)</u> ② 中干し以降は、田面が強く乾くことのないよう飽水管理を継続(強い中干し・タメ水→厳禁) ③ <u>出穂後25日以降に最終かん水を入水(落水は出穂28日以降)</u> ～異常高温時には、速やかに一時湛水～高温障害を防止					① 穂肥は <u>出穂21～18日前</u> (幼穂長0.5cm)と <u>12～10日前</u> (葉耳間長0cm)の2回に分けて施用 →1回あたり施肥量のめやすはN：1.0kg、2回合計2.0kg／10a ② 2回目の穂肥は確実に施用する ③ 急激な葉色低下がみられた場合は追加穂肥を施肥(<u>過剰施肥に注意</u>)→玄米タンパク基準：6.3遵守)					① 出穂後の積算気温：1050～1100℃を参考に <u>籾の黄化率(85～90%)を確認して適期に収穫する</u> ② <u>胴割粒の発生防止：刈遅れに注意</u> ～籾水分の確認～ <u>適正な乾燥温度・速度で急激に乾燥させない</u> →基準適合米に仕上げる ③ 収穫後は早めに土づくり資材の投入+稲わらの秋すき込み																			
	《施肥のめやす》 (成分 kg／10a)					《生育のめやす》					《品質向上・収量確保目標》					《品種特性》					《収量構成要素》																								
	区分	時期	N成分	備考		生育ステージ	時期	草丈 (cm)	莖数 (本/㎡)	葉色 (SPAD)	玄米1等級比率	90%以上		10a当たり収量		540kg	早晩生	耐倒伏性	葉いもち	穂いもち	紋枯病	収量 (kg/10a)	1穂籾数 (粒)	穂数 (本/㎡)	㎡籾数 (百粒)	登熟歩合 (%)	千粒重 (g)																		
土づくり	収穫後	—	稲わら秋すき込み 有機質・けい酸質資材		1回目穂肥	7/23	65	550	33～36							540	晩生	やや強	やや弱	弱	やや弱	280	70	400	23.5																				
基肥	～田植え	3.0kg	地力に応じて		2回目穂肥	8/1	*葉耳間長：0cm																																						
穂肥1	出穂21～18日前	1.0～1.5kg	遅れずに施肥～籾数確保		出穂期	8/12	78 (稈長)	400 (穂数)	34～36																																				
穂肥2	出穂12～10日前	1.0～1.5kg	しっかり施肥～登熟向上																																										
合計	—	5.0～6.0kg	*一発基肥 トータルN：5.0～6.0kg																																										